

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」2月号（通巻第9号）
2007年1月28日発行
【発行人】赤塚祐一郎
【編集人】大森美知子
【発行所】株式会社ラジオカフェ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281
http://www.radiodays.jp

2

February Edition
2008, vol.9
Free of charge

この人の声が聴きたい◎2月

大瀧詠一さん（ミュージシャン）

福生の仙人にして 自己相対化の達人

世に、カリスマと言われる人は多いが、この人ほどカリスマという言葉が似合わないカリスマも珍しい。輝く栄光も天才の気配も、市井人の顔の下に消しているひと、それが私の初対面の印象であった。それでも、そもそも超人的な資質を有した預言者をカリスマというなら、大瀧詠一は間違いなく現代のカリスマのひとりなのである。私の竹馬の友であり、現在は武蔵小山で「アゲイン」というライブハウスの主人をやっている熱狂的なナイアガラ（大瀧詠一のファンの別名）である石川茂樹くんと言われれば大瀧詠一は「七つの顔を持つ男」だということになる。

ご存知のように「七つの顔の男」多羅尾伴内とは、戦後間もない日本映画のヒーローの名前で、片岡知恵蔵演じる名探偵藤村大造が変装する七つの顔の男（擬態）のひとり。「あるときは、片目の運転手、あるときは出っ歯のせむし男、またあるときは手品好きのギザな紳士、流しの歌手、そしてしょぼくれた探偵、しかしてその実態は…」という台詞は名調子で大流行した。

大瀧詠一の名前を最初に知ったのは、「はっぴいえんど」というグループからである。後に日本の音楽シーンを主導することになる細野晴臣、松本隆、大瀧詠一、鈴木茂からなるグループは和製ロックの先達として注目され、人気を集めたが数年で解散。その後、大瀧は、自らの名前に由来する「ナイアガラ」というレーベルをつくり、福生のスタジオにもって様々な実験的なアルバム制作を行う。ここから仙人



伝説が始まる。大瀧の活躍は多岐にわたり、あるときはシンガーソングライター、あるときは作曲家・アレンジャー、またあるときは音楽プロデューサー・レコードレーベルのオーナー・ラジオのDJと、まさに七つの顔を持つ男で地で行く。ちなみに、二代目多羅尾伴内こと小林旭の名曲「熱き心にも大瀧の作品。また、大ヒットとなった『A LONG VACATION』の編曲は多羅尾伴内となっていた。勿論、多羅尾伴内は、大瀧の擬態名称である。

さて、昨年末その大瀧詠一さんとの待望の鼎談が、上記アゲインで行われた。石川くんの他には、やはり大瀧さんを師匠と仰ぐナイアガラにして現代思想の売れっ子内田樹。ご機嫌な鼎談となり、音楽は勿論だが、映画、野球、芸談、ラジオ、エンジニアリングと話に際限がない。驚くべきは、どんな話を振っても、ひとひねりもふたひねりもあるコメントが即座に帰ってくる。そして、そのどれもが噛み締めれば味の出るような不思議な含蓄に富んでいる。私たちは、物知りのご隠居を囲んだ子供のように囁き立て熱狂したのである。「だれでも、ミュージシャンとか、映画監督とか、作家とかといったバックグラウンドを背負った人間として話をするんだよね。だけど、一対一で話すときは素の、裸の人間として話をするのが理想さ。それは難しい。でも、おもしろい話にもっていきばいいのさ。」そうか、このひとは自己相対化の術が使える稀有な天才だったのだ。

（ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美）

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中！

会員（会費無料）になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りをお願いします！

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、錚々たるお客をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一章、音楽家の大瀧詠一さんとの対談「大瀧詠一」の第一回が無料ダウンロード中。音の旅「小ゑん・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅」も登場です。

文芸の街からは、作家の大岡玲さん、関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さん、江戸文化研究の田中優子さんなど多彩な解説者を迎えた名随筆のアンソロジー「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優の馬九せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする「詩人の愛」I・IIをお届け中。サイトでは、川端康成賞作家でもある詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家楽館中に現代に演じきる斬家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鑲を削る斬家たち。ライブ音源だけに一期一会の斬に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの斬家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてください。まずは、試聴ボタンを。

●第10回 オリンパスシンクする寄席

【日時】2月28日(水)午後6時45分開演(午後6時15分開場)

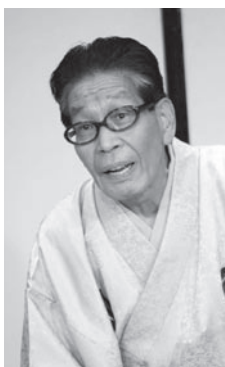
【場所】お江戸日本橋亭(半蔵門線 銀座三越前)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の噺を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が新作落語を中心に二席ずつ競演します！

三遊亭圓丈

(さんゆうてい えんじょう)

三遊亭圓生門下。昭和五十三年、真打昇進、「圓丈」に改名。現在の新作落語の流れを作った人物でその作品に影響された噺家は多数いる。多趣味で知られており、この趣味が高じて「日本参道狍犬研究会」を設立するなど、その活動は幅広い。



柳家小ゑん

(やなぎや せえん)

柳家小さん門下。昭和六十年、真打昇進。独自の落語哲学を持ち、その存在は「新作落語」の分野において必要不可欠な存在。また、フナタリウム落語会など落語の可能性を探る活動を積極的におこなっている。



明烏い話

連載第10回

本田久作



いつだったか小満んが高座で自身の師匠である文楽の話をした。以前は自分の女房と一緒に文楽の墓参りをしていたが、近頃では一人で行くことにしている、と小満んは言う。

というのも、一緒に墓参りに行くと、必ず女将さんが文楽の墓に向かって「師匠、小勇(小満んの前座名)がこの前こんなことを」と告げ口をするからだそう。自分のしくじりを師匠に聞かれたらたまったものではない。だから今は女房を連れずに一人で墓参りに行くようになった、と小満んは言うのである。死んだ後でもなお怖いと思える人がいるというのは実に羨ましいことで、こういう話を聞くことではないかとすら思ってしまう。

小満んの師匠の文楽は惚れに惚れた円馬を評して、あの人のゲロなら舐めろと言われれば舐める、と言った。だが、これはなにも文楽に限ったことではなく、噺家の弟子ならば皆師匠に対して同じ感情を持っているだろう。文楽の弟子の小満んも例外ではないはずだ。文楽は弟子に小言を言う時よく「そんなことでは天が許しませんよ」と言ったそうだが、もしも「天」の代わりに「そんなことでは私が許しませんよ」と言われたら心底震え上がっただろうと小満んは自著に書いている。小満んにとっては天よりも文楽の方が上なのだ。生憎なことに、私たちにはこういう人はいない。

親のでも恋人のでもその人のゲロは舐めたくないし、天よりも偉大だと思える人になど逢ったこともない。私は円馬のゲロが舐められる文楽は幸せだと思し、天よりも文楽の方が怖いと思っている小満んが羨ましい。

こうした噺家たちの師匠崇拜は意外なものを生み出す。一つは批評である。私も含めて素人(つまり噺家という玄人ではないということ)の落語評が往々にして的外れになるのは、その知識や経験の量が玄人に比べて圧倒的に少ないこともあるだろうが、それ以上に玄人の持つ特別な思いこみが原因になっている。たとえば、私たちは橘家円喬がとつもない名人であったことを知っている。だが、今生きている人の中で実際に円喬を聞いたことのある者はいない。円喬の音源はわずかに残っているから、それを聞けば名人芸の片鱗に接することはできないでもないが、あれを名人の芸と思うのは私たちが聞く前から円喬は名人だと思込んでいるからで、そうと知らなければ一度聞けば忘れてしまう程度のものでしかない。にも関わらずいまだに円喬が名人であることが喧伝されているのは、志ん生や円生たちが円喬について述べた言葉が印象的だったからである。彼らと同時代に生きた文人たちの中でも円喬の芸を誉め称えた人がいるにはいるが、彼らは批評という点に関しては噺家よりは腕前があったにも関わらず、その文章は志ん生や円生の円喬評には及ばなかった。その芸に対する思い入れが違ったからである。その証拠に、文人たちには舐められなかったであろう円喬のゲロを、志ん生たちなら舐めたであろう。これは比喩ではない。実際に志ん生は円喬が高座で使った湯飲みに入っていた白湯を飲んだという。円喬は当時もつとも怖れられていた

不治の病労咳を患っていた。だから他人に病気をうつさないようにと自前の湯飲みを持ち歩いていたのである。ところが、当時の前座たちは円喬の芸に憧れるあまり、円喬が口をつけた湯飲みに口をつけた。これはゲロを舐めるどころの騒ぎではない。こういう話を聞くにつけ、芸人ならばそれぐらいのことはするだろうと思いはしても、芸人ではない私は実際にはそんなことはしないし、したくないし、できないとも思っている。私が噺家を羨む所以の一つである。

●ほたて きゅうざき

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇三年の「仏の遊び」が国立演芸場日本募集佳作受賞以来、落語、漫才など新作台本関係の賞を毎年総ナメの業績が目撃される。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本募集優秀作)「僕の葬式」(按察の夢)「幽霊蕎麦」(いざれ落語協会優秀作)など。

私の讀本 ばなし 九

瀧川鯉昇

き 『茶の湯』

前座時代に先代の柳朝師匠に稽古をつけてもらった。大須演芸場の十日間興行のある日、師匠が翌日の十一時から稽古をつけてくれると、でも実際にお呼びがかかったのは朝の八時。当時の前座仲間三人で客席から聴かせてもらったのですが、前日の飲みすぎで、いつの間にか三人ともぐっすり……。でも師匠からのお小言はありませんでした。その後、半年間で五回聴かせてもらいましたが、毎回変化があり、会場や客席の雰囲気によって演出や構成を変えたいことを考えさせられた噺のひとつです。

式 『味噌蔵』

元来、必要なものにはお金を使っても、欲しいものは買わない儉約する(ケチ?) 性分なので、自分の私生活から、まぐらやくすぐりが出てくるんですね。

参 『時そば』

海外に呼ばれたときによくかける噺。通訳の方にあらかじめ「最初は細くておいしい蕎麦、次は太くてまずい蕎麦」とだけ説明してもらい、あとは通訳無し。でも、ちゃんとウケるんです。物を食べるって万国共通なんですね。

第10回 ラジオデイズ落語会

「日時」2月2日④午後2時半開演（午後2時開場）
「場所」コア石響（四ツ谷駅徒歩7分）

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は、毎回気鋭の二ツ目さんにお願ひします。

柳家小満ん

◎なまこ・まんこ

桂文楽に入門。昭和四十六年、柳家小さん門下へ。昭和五十年、真打昇進、「柳家小満ん」を襲名。俳句をたしなみ、文章を書く粋な噺家。文案の「詠っぽさ」、小さんの「滑稽さ」、その両方を譲り受けたその高座に注目。



橘家圓太郎

◎ちんぼん・えんたろう

春風亭小朝門下。平成九年、真打昇進、「橘家圓太郎」を襲名。史上初となる「につかん飛切り落語会大賞」を受賞するなど、二ツ目時代から実力が高かく評価されていた。「勘定板」から「火焰太鼓」まで様々な噺を演じ、トライアスロンで鍛えた大きな身体を使つての高座には迫力がある。



●お囃子 松本優子

（まもと ゆうこ）

古今亭菊六

◎きんてい・きくろく



古今亭田菊門下。平成十八年、二ツ目昇進。趣味は騎馬に公園でのジョキング。師匠同様、心地良い声の高さとテンポで軽妙洒脱に噺を演じる。特に展開を進めるテンポにおいては二ツ目の中でも頭一つ飛び出ており、今後の活躍を期待せずにはいられない。

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗⑧



柳亭こみち

「人前で喋って笑われて何が楽しいんだ」うなだれた父が言った。6年前、へ噺家になりたい」と打ち明けた日の事だ。大事に育てた娘が就職し、あとは結婚でもすれば我が家は幸せなのに。「なりたくてもなれるとは限らない」との説得に耳を貸さない私に、父は「気でも狂ったか」と。

父は新潟出身の実に大人しい男だ。仕事して食事してテレビ見て風呂入って寝る、その単調な暮らしで十分満足するような父を、つまらない人だと私は思っていた。入門後も、父はなかなか高座を観に来てくれない。ひたすら修行を続けて1年経つ頃、父がやっと寄席にきた。私に内緒で。こっそり。

帰宅すると、無口な父が珍しく私に話しかけた。「何事だ？」と驚く私に温かく語り続けた。

「父さんは落語をよく知らなかった。落語はテレビでやるようなガチャガチャしたのではなく、伝統芸能なんだね。家にいるお前はいつも疲れた顔して不機嫌だ

ど、高座では別人だった。見た事のない我が娘の生き生きした姿を目の前にして、父さんは「好きな事をして生きるのには幸せなんだ」と感じたよ。頑張りなさい。」父はつまらない男なんかじゃなかった。還暦過ぎて価値観をがらりと変えられる、心の柔軟な人だと知った。今では、父は誰よりも私を応援してくれている。

◎りゅうてい・こみち

社会生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊、五重奏協奏（音楽家）。落語協会野球部・チームR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第9回

親類縁者



松井高志

「親類縁者」と書いて「みよりのたより」と読む。三遊亭圓朝の「眞景累ヶ淵」の速記（小相英太郎による・昭和31年岩波文庫版）などに使われているあて字である。

話芸に出てくる「みよりのたより」のない人といえば、「累ヶ淵」の新吉（旗本・深見家の二男で、惣領の兄がいるはずだが、消息不明という設定）とか、「らくだ」の馬とかがただちに連想され、こういう境涯を、

●よるべなきさすておがね
寄辺渚の捨小舟

などと講談ではよくいう（余談だが、福沢諭吉が履歴を口述した「福翁自伝」でも使っている）。そのようなサツバツとした生活を送りたくなければ、親戚との交際をせいでい大事にしなればならんよ、という昔の人（演者および聴衆）の教訓が暗示されている、と受け取れなくもない。

けれども一方で、ちよつと「みよりのたより」を斜に見た諺のたぐいもあって、

遠い親戚より近くの他人

という文句がその典型的な一例である。「疎遠なる親類よりも親密なる他人の方は却りて力になるものなり」との義なり」と、高宮感齋の「俚諺通解」（明治32年）という本にある。もつともこれは落語「ひとり酒盛」（桂米朝）で引つ越し先を訪ねてきた友達に恩着せがましいセリフを吐いて雑用を押しつけ、酒を全然飲ませず、しまいに怒らせてしまうしようもない酔っぱらいの引用する文句なのであるが。

従兄弟従々兄弟は他人も同様

これはやはり落語の「六尺棒」から。さる商家の一人息子は道楽が過ぎて勘当寸前。業をにやした旦那（親父）は、「お前などは廃嫡して、大勢いる甥か姪から選んで跡目を継がせる」と息子を脅す。これに対し、全くひるまぬ若旦那は、この諺を引用して、「他人に身代を譲るのか」と口応えするのである。『諺語大辞典』には、「従兄弟ハトコハ泥溝（ドブ）ノ端（ハタ）ニモアル」「従兄弟ハトコハ道端ノ犬ノ糞」という諺が載っている。ともに、「多くあれどもさしてたのみにならぬ」ことをいうのださうである。

この手の話題になると、お約束のように引き合ひに出されそうなの、「血は水よりも濃し」というやつは、元来英語の諺で、話芸の中ではあまり引用されていない。

●まいつ・たか

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『半四郎の出世・十右衛門の背徳』（タカ・ブレン）、『人生に効く！ 話芸のきまり文句』（平凡社新書）など。『話芸』きまり文句 辞典 サイ ト <http://waigedon.com/codopnity.com/>

ラジオデイズ落語会

(毎月1回土曜開催)

【会場】コア石響(四ツ谷) 【本席】25000円

【時間】午後2時半開演(午後2時開場)

●第11回 3月1日(土)

橋家文左衛門 柳家三三三 春風亭一之輔

●第12回 4月5日(土)

三遊亭歌武蔵 柳家喬太郎 柳家わさび

※ご予約申込開始は各回前月1日から、ラジオデイズURL <http://radiodays.jp>もしくは、予約受付専用電話「03-3334-1113」より、先着順です。

オリンパスシンクする寄席

【会場】お江戸日本橋亭 【本席】20000円

【時間】午後6時45分開演(午後6時15分開場)

●第11回 3月14日(金)

古今亭寿輔 古今亭錦之輔

※ご予約は、オフィスMs「03-5721-5355」まで

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は「O3」の辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定 (深夜のお客様)

2月5日 三遊亭白鳥(落語家)

12日 川崎隆章(放送史研究者・ラジオデイズレクター)

19日 輿水精一(サントリー山崎工場チーフレンダー)

26日 山崎剛太郎(字書翻訳家)

3月4日 金井美恵子(作家・画家)

睦月の落語会ふたつ

今年初めのオリンパスシンクする寄席(1月12日)は、柳亭市馬師匠と三遊亭好二郎さん、

初春に相応しいネアカ系。お江戸日本橋亭も超満員で華やかさが違う。初めは好二郎さん、

ネタは「だくだく」。上方では「書割盗人」という粋な泥棒の噺。家のなかに何も無いので家財道具の絵を描いてもらった男がその晩

寝ていると泥棒が侵入、すぐ絵だと気付くがこのまま退散はつもらぬと盗んだつもり。気付いた男も泥棒を退治するつもりと芝居づく

何とも言えない心の余裕がうれしい噺。お次は市馬師匠。立派な侍が最良の古道具屋を訪

れ掛け軸の絵などを話題に煙管で一服、立派な袴に火玉を落とすが動じない。それを見て

いた間抜けな男が真似をするが様にならず爆笑を誘う。ネタは先代小さん直伝「普段の袴」。

生来の明るさが爽やかな市馬師匠、素敵です。仲入り後は好二郎さん。さびしい独身OL

の部屋、もしも観葉植物たちがしゃべり出したら? ネタは新作「アロエヨーグルト」。植

物の種類によって異なるポーズと考え方が笑わせる。このしとフツツっぽい噺家だがダダ

者ではない。トリは市馬師匠。こんにやく屋の親父扮する大和尚と旅の雲水の禪問答が圧

巻の「こんにやく問答」を好演。何を訊いても無言なのでジェスチャーで質問する雲水に、

何も知らない親父が大勝利! もちろん音声だけでも笑いながら仏教の神髄が学べる何度聴

いても有り難い噺。極楽在住の先代小さんをおい出す。

一方、ラジオデイズ落語会(1月19日)は

てえと、こちらも大入り。一押し柳家喜多

八、柳家小ゑん両師匠の登場。開口一番、鈴々舎わか馬さんのネタは「鷲とり」。捕まえた

鷲を腰の帯にはさんでおいた男、鷲たちが羽ばたき空へ? メルヘンチックな馬鹿馬鹿し

さがたまらない噺。続いて小ゑん師匠が登場。隠居に俳句を教わる八五郎、へんてこな俳

句や川柳がポンポン飛び出すネタは「雪でん」、近頃はサゲまでやらない「雑俳」とい

う演題で知られています。仲入り前は喜多八師匠、昔懐かしい近所の悪ガキどもが商売人

をおちょくる「いかげや」で会場を爆笑の渦に。こまつしやくれた子供達といかけ屋や鰻

屋の親父とのやりとりでテンションが高まっていくのが面白い。

仲入り後も喜多八師匠。ネタは「近日息子」。少し間の抜けた倅を気遣いながらも小言の多

い親父、とぼけた息子は死んでいない親父の葬式まで出そうとする。師匠は粗忽者をすこ

ぶる優しく演じて見せます。トリは小ゑん師匠、ネタは代表作のひとつ「レプリカント」。

酔っぱらうと何でも持ってきてしまう男、目覚めた時に眼前にあったものは? ありそ

う日常から出発して有り得ない世界に引きずり込むのが小ゑん流。古典も新作もたつぷり

落語が楽しめた土曜の屋下がりでした。(ラジオデイズ寺和尚)



オリンパスシンクする寄席の"楽屋口(^o^)"

シンクする寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(^o^)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R (シンクする) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンク★R公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R (シンクする) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクする寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンクする (Sync ★R) とは?

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を活用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

本格的な冬景色となった新宿御苑を窓から眺めていても、あまり変化を感じられないので、昼休みに散策路を歩いてみることに。(こは無料) この寒空の下、誰もいないかと思いきや、ベンチには読書や音楽を聴く人たちがちらほら。確かに澄み渡る空気を吸っていると五感が冴える気が。よし、次は私も落語を聴いてみるか。「うどんや」の売り声がいとも以上に心に沁みそうです。

